

みのの EDO

東京⇄笠原情報誌 MAIL版

多治見市
モザイクタイル
ミュージアム

特別展「敷瓦の世界」

「タイル」前の物語

多治見市モザイクタイルミュージアムでは、特別展「敷瓦の世界」を開催中（～9月24日（月・振休）まで）。

展示の概要と7月21日（土）に開催された町歩きツアーの様子を紹介する。

（撮影／小寺克彦さん、銅板転写用紙と本業敷瓦以外）



寄贈された印花文敷瓦。明治30年頃に建てられた土蔵の周囲に敷かれていた。大きさ約235～240ミリ角、厚さ約20～25ミリ。



明治時代に銅板転写の技法が流行。この転写用紙についている焼き物用の絵具を敷瓦に写し取る。中央は蝙蝠（こうもり）をデザインしたもの。



染付印花文敷瓦（明治時代前期）
瀬戸市蔵



鉄釉葉印花文敷瓦（明治時代末期）
INAXライブミュージアム蔵

開催中！



銅板転写によって模様が施された本業敷瓦（明治時代）
INAXライブミュージアム蔵



茶道具として使われた織部松竹梅敷瓦（明治時代初期）
INAXライブミュージアム蔵

3階の企画展示室に入ると、フロア中央に敷かれた敷瓦に、圧倒的な存在感で迎えらる。その数65枚。色が様々あることに驚かされる。

これは笠原町内の土蔵の周囲に敷かれていたもので、改築にともない、昨年ミュージアムに寄贈された。個人宅に印花文の敷瓦が使用されるのは珍しいという。「この敷瓦が寄贈されたことが、今回の展示を企画するきっかけとなったんです」と、学芸員の村山 閑さん。

敷瓦の歴史は、仏教が伝来した6世紀にまでさかのぼるが、普及したのは鎌倉時代。いぶし瓦と同じ技法でつくられ、仏教寺院の床に敷かれていた。江戸時代には施釉された敷瓦がつけられ、瀬戸が中心となる生産地となり、全国的に広まった。西洋のタイルが普及

した明治時代には、そのデザインや製法から影響を受け、敷瓦は「本業タイル」へと展開。

同じデザインを施したマジヨリカタイルと本業タイルが並べて展示され、その歴史を物語っている。

壁には、現在も敷瓦が使われている寺社の写真を展示。ほとんどが非公開であり、その秘められた美しさに魅了されてしまう。

「敷瓦の研究は今まで盛んではなかったので、もっと掘り下げてみたいですね」（村山さん）。展示はその序章といえるもの。今後の展開に期待が高まる。

見学ツアー

「敷瓦のふるさと、瀬戸をめぐる」



尾張瀬戸駅付近からの風景。住宅の背後に山々が見える。地域の3分の2は山で、登り窯で多く使用する薪を調達するのに好都合だった。

特別展の関連企画として、7月21日(土)に瀬戸の町歩きツアーが開催された。猛暑が心配されたが、ツアー中はちょうどよい陽気。服部文孝さんによる案内のもと、総勢15名で瀬戸を歩いた。

瀬戸では平安時代から焼き物をつくっていました。便器や花瓶などの大きなものから、食器、タイル…と、あれもこれもつくる地域は世界的にも珍しいです



問屋業を営んだ「旧山繁商店」。この辺りは、町の有力者が邸宅を構えた一画。



町のおちこちで見られる窯垣



服部文孝さん
(瀬戸市美術館館長)

「窯垣(かがまぎ)」とは、焼き物を焼くときに使った道具の廃材を再利用してつくられた塀、土留め、建物の基礎をいう。



特別展で敷瓦製作の手順を紹介している「丸岩製陶所」。工房の入り口を本業タイルが彩る。

中国に輸出していた陶枕(とうちん)が使われている。

さすが焼き物の町!



小さなお店の入り口にも敷瓦。



神社の鳥居に本業タイル。



緑色の瓦!



深川神社(左)は奈良時代の創建。境内には陶彦社(すえひこしゃ)(右)があり、陶祖・加藤四郎左衛門景正(藤四郎)を祀る。藤四郎は、深川神社のお告げにより瀬戸に窯を開いたと伝えられる。

足を延ばして…午後は窯垣の小径資料館へ

資料館は、町の中心から少し離れた場所にある。陶磁器生産の窯元・旧寺田家の邸宅を利用。特別展でも紹介されていた、本業タイル張りの浴室を見て感激。午後は猛暑になったけれど、足を延ばした価値があった!



約1時間半の街歩きを終え、瀬戸蔵ミュージアム前で解散。近くには、旧蔵所交番を移築した観光案内所。右側の建物の屋根は、登り窯で焼かれた瓦が使われている。



道すがら、特別展で転写用紙が展示されていた蝙蝠柄のタイルを発見。



DIYといっても本格的に！～職人技を伝えたい

タイルのある暮らしを提案するTile Style深大寺では、今年からDIYのセミナーとワークショップを開催している。今年3回目となる5月のセミナー、続く6月のワークショップの様子をレポートする。



講師 安藤 健さん

タイル職人歴40年。NHK「住まい自分流」で講師を務めた経歴も。セミナーの動画制作も担当。

セミナーで作業の流れを知る



ワークショップで壁に張る



「買ったはいいいけど…」そんな人へのサポート

通販などでタイルを買う人も多いこの頃。しかし、届いたタイルを前に、どうやって張るのか、接着剤は何を使うのかと、途方に暮れてしまう人も多い。そんな人たちをサポートするべくこのセミナーとワークショップは企画された。

企画者は、Tile Style深大寺・タイルスタイリストの上野京子さん。これまで一対一でタイル張りのワークショップを開催してきたが、「何も知らない状態で実作業に取り掛かるより、最初に大まかな手順を理解したほうがよいのではないかと考え、今年からこの形式にしたと話す。ワークショップは、「インテリア壁」「テーブル・カウンター」「エコカラット」の3コース。セミナーとワークショップの参加申し込みは別だが、続けて参加する人が多いとか。



セミナー
作業の流れを知る

セミナーは日曜日の13時30分～15時30分に開催。司会進行は上野さん、講師はベテランタイル職人・安藤 健さんが務める。定員は10名と少人数で、会場はなごやかな雰囲気。

まず「タイルを張る前に知っておきたい10のこと」と題した動画を視聴。養生や割付から始まり、目地の

ふきとりまでが解説されている。次に、「インテリア壁／家具(テーブル・カウンター)」として、実際のタイル張りの様子を映した動画を視聴。撮影場所はこの建物の3階で、完成した壁を見ることができる。

その後、安藤さんが採寸、タイルの決定、養生、割付～と工程ごとに詳しく解説していく。参加者からは「目地材の硬さは?」「目地面はタイルの面と水平になるのか?」など、掘り下げた質問が次々と挙がる。

参加者は女性が多く、ほとんどの方が「洗面台にタイルを張りたい」「トイレの床に張りたい」など、明確な目標を持っていて、まさに真剣そのもの。ほかに、自宅の新築や改築を予定しているご夫婦も多いという。

セミナー終了後、上野さんに相談しながら、家に張るタイルを楽しそうに選ぶ姿が見られた。



安藤さんの指導のもと、タイルカッターでタイルを切る。意外と力が要り、難しい。

ワーク ショップ

実際に張る！

この日は、10時～の回は「インテリア壁」で、コンセントのある面を含め、3面の壁にタイルを張るコース。

タイル張り1級技能士の新井寿美江さんも加わり、指導体制も充実。最初に今日の作業を、動画を見て予習するが、早くも「難しそう」との声が聞こえてくる。

タイルを張るブースは、一人ひとりに割り当てられる。まず、タイルを張るスペースの寸法をとり、作業台にタイルを並べていく。「先生～！」とSOSの声が上がれば、すぐさま安藤さんや新井さんが駆けつける。張るときには、「重力があるので、タイルは少し上目に張るといいですよ」といったコツも伝授。プロのさすがの手さばきに拍手がわく場面も。

参加者の額に汗がにじむ。予定は3面の壁のタイル張りだが、「正面を張るだけで、精いっぱい！」との意見が。時間の都合もあり、今回は正面の壁だけを仕上げることになった。

途中休憩をはさんだ後に目地入れ。14時すぎに午前の回が終了した。4時間ほどの長丁場だが、全員が無事に作業をやりとげた。

参加者に笑顔がこぼれ、「あっという間でした」「大変だったけれど、達成感がありますね」と、感想が聞かれた。なかには「職人さんは簡単にやっているように見えるけれど、実際にやってみると大変でした」という声もあった。



スペースを測って割付し、タイルをカット。タイル張りに数学が必要なのだと気づく。表面が平らになるように張り、丁寧に目地材を詰める。頭も体も感覚もフル回転させて取り組む。



わきあいあいとした休憩時間。安藤さんの話に聞き入る。

プロの仕事への尊敬を

DIY講座といえども、張ればOKというわけではなく、基本的な作業をしっかり教えるという、少々ハードな内容となっている。

「タイルを張るのは大変!と思ってもらうのもポイントなんです」と上野さん。

「DIYだから適当でいい、ではなく、本当のやり方を教えたい。職人さんはミリ単位の繊細な仕事をしています。その大変さを理解してもらった上で、自分で張りたい人はお手伝いしたいですし、やっぱり職人さんに頼みたい、という人もいてほしいです」

企画の根底には、職人さんへの尊敬がある。そしてもうひとつ。

「暮らしを楽しく嬉しくするためにお気に入りの空間をつくる…その素材としてカーテンやラグのようにタイルを考えていただきたいと思います」

小物を飾るなど、タイルを手芸感覚で使うことも増えているが、やはり壁に使ってほしい。ワークショップで伝えたいことは、DIYの技術に留まらない。多くの思いが込められたこの取り組み。今後、様々な形で展開、結実していくことだろう。



完成!

午後のワークショップでは、同じブースの天井にタイルを張った。



Tile Style 深大寺

国内外の厳選したタイルの販売、空間提案、DIY支援などを通してタイルを使う楽しさを伝える。DIYセミナーは奇数月、ワークショップは偶数月。いずれも第4日曜日に開催。参加費はセミナー3000円、ワークショップ8000円。

石州瓦メーカー・亀谷窯業を訪ねて 「伝統を守りつつ、挑戦を続ける」



石州瓦の屋根が連なる波子(はし)の風景。
同じ石州瓦といえど、様々な色あいがある。

山陰本線を西へ向かうにつれ、車窓風景に赤褐色の瓦屋根が増していく。この石州瓦は三州瓦、淡路瓦と並ぶ、「日本三大瓦」。伝統的な製法で石州瓦を生産する一方、食器やタイルなど、幅広い商品展開に取り組む「亀谷窯業」を訪ねた。

石州瓦とは

島根県の西部、大田市から江津市、浜田市、益田市で生産される瓦で、赤褐色が特徴。出雲地方でとれる来待石(きまちいし)の釉薬と1200度以上の高い焼成温度から作られる。

瓦のよさを伝えるために

亀谷窯業は、島根県浜田市に所在する石州瓦メーカー。創業は文化3年(1806年)、200年の歴史をもつ。

山陰本線の浜田駅から車で10分程の場所に工場があり、併設する建物では、新商品やアウトレット品などを展示販売。瓦の形をした皿や箸置き、瓦カップなどの食器、直火用耐熱瓦など様々な製品が並ぶ。

瓦以外の製品を作るようになったのは10年位前からという。

「瓦だけではやっていけませんから」と、社長の亀谷典生さん。近年の地震報道などの影響もあり、瓦業界には、厳しい状況が続いている。

「瓦は近くで見たり、触れたりすることができません。いくら瓦は吸水率も低く、耐久性もありますよ、と言っても一般の人には伝わらない。そこで身近な製品で、瓦のよさを伝えたいと思ったのです」

今ではこの瓦以外の製品が、瓦と同等の売上げを上げるほどの人気商品となっている。

1枚から受注生産

瓦食器のほか、今やタイルも主力製品となっている。1枚から注文に応じる受注生産で、細やかな要望にも応える。



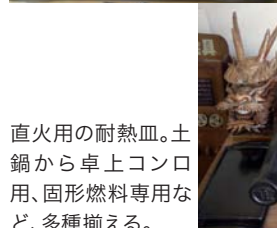
「企業秘密なんてありません。うちしかできないことをやっていますから」と亀谷さん。



瓦食器は、通常の瓦と同じく来待石の釉薬を使い、1350度で焼成して作る。お皿、箸置きや10ミリ角ほどのピアスマで、瓦の形を忠実に再現。



切巴の箸置きも。



直火用の耐熱皿。土鍋から卓上コンロ用、固形燃料専用など、多種揃える。



伝統芸能である石見神楽の面を施したぐい飲み。

タイル製作のきっかけは、益田市にある「島根芸術センター グラントワ」からの床タイルの受注という。元々美濃焼のタイルが使われていたが、補修時に製作元のメーカーが廃業していたことから、「地元で作ることはできないか」と依頼を受けた。試作を重ね、既存のタイルの色を来待石の釉薬で再現した。

また、ホテル「ザ・リッツ・カールトン東京」からの発注では、特注色を作製し、タイルに手がけて釉薬を塗布し、色むらを表現した。

伝統を守る

「新しいものに挑戦するから、古い技術の大切さがわかります」と亀谷さん。瓦作りの作業は10工程あり、今もほとんどが手作業。釉薬には来待石と水のみを使用し、1350度の高温焼成という従来どおりの製法を貫く。壁に掲げられた「来待がなければ、瓦をやめる」という言葉にその矜持が見て取れる。

その品質は、重要伝統的建造物群保存地区である岡山県高梁市吹屋や世界遺産の石見銀山などで、文化財級の建物の瓦も手がけていることで証明済み。伝統技法に基づく、サビ瓦も復活させた。

「カフェを開店するという、瓦好きのご夫婦が店舗に使う瓦を見に来てくれたんですよ」と、妻・亀谷みゆきさんがほほえむ。顔の見える関係を大切にしている様子が窺える。

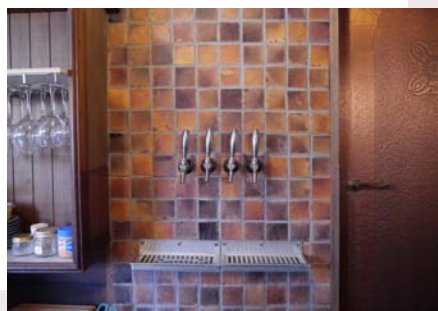
手間を惜まず、品質のよいものを相手に届ける―。多彩な商品展開は、伝統技術とともに、こうした原点を持ち続けるからこそ、成り立つものなのだろう。



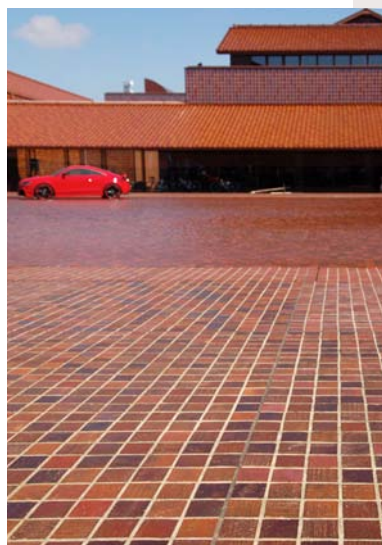
亀谷窯業の倉庫。石州瓦の屋根が美しい。



瓦に釉薬をかけるのも手作業で行う。



江津駅近くカフェの店内で偶然見つけたタイル。



島根県芸術文化センター グラントワ

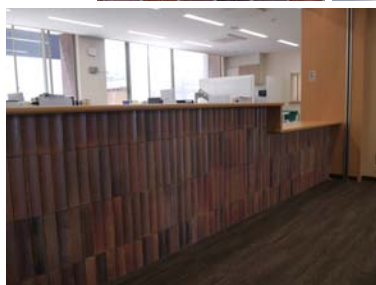
中庭改修時に床タイルを製作。設計は、内藤 廣氏。

近
隣
で
使
わ
れ
て
い
る
タ
イ
ル



パレットこうつ

江津駅前にある公共施設。カウンター下には表面が曲面となっているタイル。床タイルには布目のような模様がつく。



米子公会堂

改修時の床と壁のタイルを製作。既存のタイルは浜田市で作られていた塩焼き（焼成時に塩水を利用）によるもの。同じ製法は不可能なため、還元焼成により製作した。

